


北海道がんセンターたより

平成17年2月発行

独立行政法人国立病院機構 北海道がんセンター

〒003-0804 札幌市白石区菊水4条2丁目3-54 TEL 011-811-9111

□ ホームページ <http://www.sap-cc.org>

編集発行人: 荻田 征美



北海道がんセンターの理念

私たちは、国民の健康で幸福な生活のため、最新の知識と医療技術をもとに、良質で信頼ある医療の提供に努め、特に「がん克服」に寄与することを目指します。このため、

- 常に、医療の質と技術の向上を目指します。
- 研究、教育研修を推進し、医療・医学の発展に寄与します。
- 患者さんの権利を尊重し、誠実な医療を実践します。
- 自主自律、創意工夫の精神で病院運営に当たります。

脳神経外科紹介



1. どのような病気を扱っているか：脳神経外科では主に脳卒中と脳腫瘍の診断・治療を行っています。以前の病棟は脳卒中急性期の患者さんと脳腫瘍の患者さんがほぼ同数でしたが、北海道がんセンターに名称が変わってからは悪性脳腫瘍の患者さんの比率が増えてきました。

2. 脳腫瘍について：脳腫瘍は脳の組織から発生する原発性脳腫瘍と体の臓器のがんが脳に転移する転移性脳腫瘍とに大別されます。当科の原発性脳腫瘍の治療で多いのは悪性グリオーマと悪性リンパ腫という腫瘍です。手術だけではすぐに再発してしまいますので、術後に放射線療法や専門家による化学療法が必要で、その為に北海道でも限られた施設でしか治療を行うことが出来ません。一方、転移性脳腫瘍はもともと体にがんがありますので、原発巣の治療を行っている内科、外科、婦人科などいろいろな診療科と密接な連携が必要になってきます。以上のような理由から、当科は北海道における悪性脳腫瘍の治療センターとして、各施設から患者さんの紹介が増えてきております。

3. 脳腫瘍の症状：一般的に言って脳腫瘍はそのスピードに違いはあっても徐々に大きくなります。症状は腫瘍が正常の脳の組織を圧迫・損傷する為の局所症状と、脳は頭蓋骨に囲まれておりますので、腫瘍の増大によって頭蓋内の圧力が高くなるために起きる症状（頭蓋内圧亢進症状）とに大きく分けられます。局所症状は腫瘍が出来る場所によって様々ですが、無関心、痴呆などの精神症状、失語症、運動麻痺、感覚障害、視野の異常、けいれん発作など

がみられます。頭蓋内圧亢進症状は頭痛、嘔気・嘔吐、視力障害などで、進行しますと眼球運動障害や意識障害が出現してきます。

4. 当科での脳腫瘍の診断や治療の特徴：脳腫瘍はCTやMRI検査で簡単に診断が出来ます。当科では腫瘍のあるなしだけではなく、MR Spectroscopy (MRIを用いて腫瘍に含まれる化学物質の解析を行う) や SPECT (悪性なほどトレーサーの集積が多い) などを行い、組織診断とその悪性度を判定し適切な治療を行います。超音波エコーを用いて後遺症が出ないように手術を行ったり、放射線科による定位的放射線照射など、個人個人に合った最善の治療を目指しております。さらに最近は脳腫瘍の遺伝子を解析し、一番適切で治療効果があると思われる化学療法を選択したり、あるいは経口の抗がん剤を用いて積極的な外来での維持化学療法を行っております。

5. 脳卒中について：もう一つの当科の仕事は救命救急センターに所属しているため、脳梗塞、クモ膜下出血、脳内出血などの脳卒中の治療を24時間体制で行っています。最近多い脳梗塞は、動脈硬化のために脳の血管が徐々に細くなり閉塞してしまう脳血栓症と、心臓などから血栓が運ばれて脳の血管を塞いでしまう脳塞栓症に分かれます。症状は血管の詰った場所で違いますが、主に突然の体の半身麻痺、感覚障害、失語症、視野障害、意識障害などがみられます。当科ではこうした患者さんに対してMRI、DSA (脳血管撮影) などですぐに行い、その後症例によっては細いカテーテルを使用した血管内手術で、詰った血管を再び開通させることも行っています。

(次のページへ)

Contents もくじ

脳神経外科紹介	脳神経外科医長 伊林 至洋	1
当院のマルチスライスCT	放射線科 診療放射線技師 北山 明雄	2~3
～治験管理センターから公開講座のお知らせ～	治験管理センター 松井 礼子	4

6. 外来担当医師とその紹介

医長 伊林至洋 (月・金) : 日本脳神経外科学会専門医、日本脳卒中学会専門医、趣味 : 風景の写真撮影、パスタ料理

医師 池田 潤 (火・水) : 日本脳神経外科学会専門医、日本癌治療学会臨床試験登録医、趣味 : カヌー、テレマックスキー

医師 秋山幸功 (木) : 日本脳神経外科学会専門医、趣味 : 温泉

7. 最後に当院の脳神経外科の特殊性について :

脳腫瘍の為に麻痺があって歩けない人、突然けいれん発作をおこす人、また失語症の為に何を言っているのか分からない人、さらに意識障害があって不穏の為に大声を出す人、痴呆様症状を呈する人など到底家庭ではお世話をすることが困難な重篤な患者さんがいます。加齢などによる痴呆症状は徐々に進行

し治療はなかなか困難ですが、脳腫瘍によるこうした症状は治療によってかなり軽快することがあります。しかしそれには時間がかかり、それまでは医者も看護師も大変な思いをして治療や日常の看護を行っています。症状が軽快し退院となった時は、本人はもとより家族の方の喜びは勿論ですが、我々スタッフも我々しか出来ないこうした医療に対してある種の達成感を感じることが出来ます。紙面を借りて、いつも慢性的な人手不足にもかかわらず、笑顔で日夜献身的な看護に当たってくれている田代師長や病棟スタッフに心から感謝を申し上げます。

当科は適切な検査、詳しい説明、患者さんの立場に立ったQOLを考えた治療を目指しております。より質の高い医療の提供をモットーとしておりますので、セカンドオピニオンのご相談なども遠慮なくお尋ね下さい。

当院のマルチスライスCT

放射線科 診療放射線技師 北山 明雄

新しい高性能のCT (マルチスライスCT) を導入して約2年が過ぎました。これは高速、高画質を兼ね備えた機種で、当院では2台のCTで全身検査を行っています。

このマルチスライスCTが従来のCTより短時間で様々な部位を細かくきれいに撮影することができるため、患者さま1人あたりの検査時間が短縮されます。

CTとは、Computed Tomography (コンピュータ断層撮影装置) の略で、身体に幅の狭いエックス線を高速回転させながら照射することで得られたデータをコンピュータを使って計算し、身体の断面画像を作成する装置です。

CTは身体の全身どこでも撮影する事ができます。

基本的に、出血・骨等のエックス線が透過しにくいものは白く、肺や・空気等のエックス線が透過しやすいものは黒く表示されます。

従来のCTは、エックス線検出器は1列だったのですが、新しいマルチスライスCTは検出器を複数列に組み合わせています。

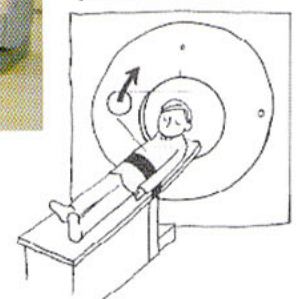
検出器の増加により、一度に複数の画像が撮影でき、更に短時間で薄く精密な撮影が可能となりました。

マルチスライスCTでは、CT装置の中心にある大きな穴に体を入れて、体の周りからX線をあてることによって、体の中の断面 (輪切り) をみることができます。検査自体は、痛みや刺激は全くありません。

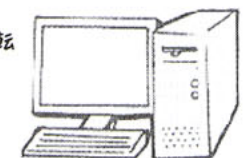
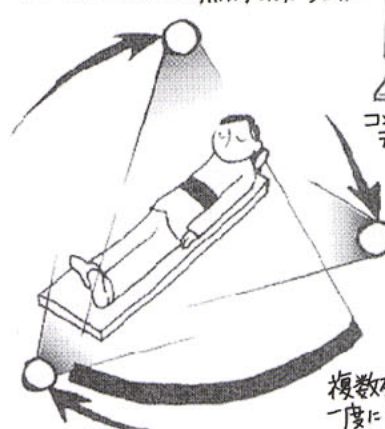
従来の断面 (輪切り) の検査だけでなく、体軸方向 (縦方向) の検査が可能になりました。撮影したスライスを積み上げることでデータの再構成を行い、それによってCTアンギオ (血管を撮影) や3次元画像 (立体画像) を作成し、診断の補助や手術のシミュレーションを行うことなどが可能です。



CTとは...

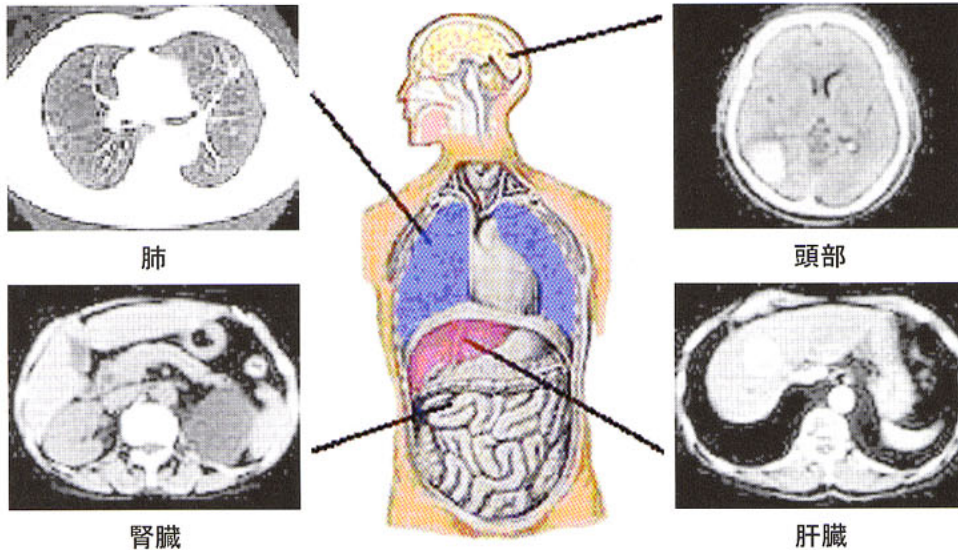


又管球が
体の周りをエ線を照射しながら回転



コンピュータで
データを計算し画像を作成

複数列のエ線検出器で
一度にたくさんの画像が撮れる

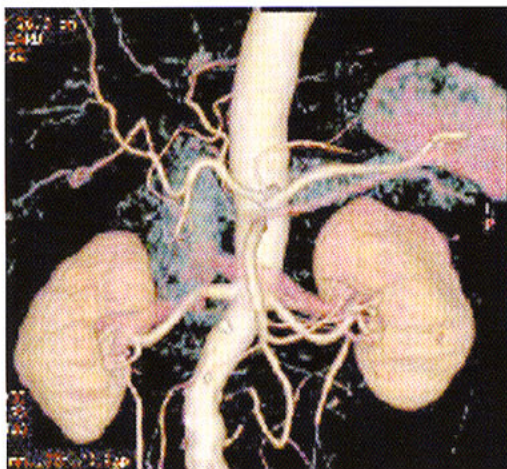


検査中は検査用ベッド上で静かに横になっていた
 だき、放送の声にあわせて息を吸ったり止めたりす
 るだけで、苦痛の比較的小さい検査です。時に病変
 の描出や質的診断、あるいは血管の状態などを詳しく
 診断する目的でヨード性X線用造影剤を静脈から
 注射しながら検査を行う場合もあります。造影剤を
 注射されますと、一時的に頸部や胸部に熱くなった

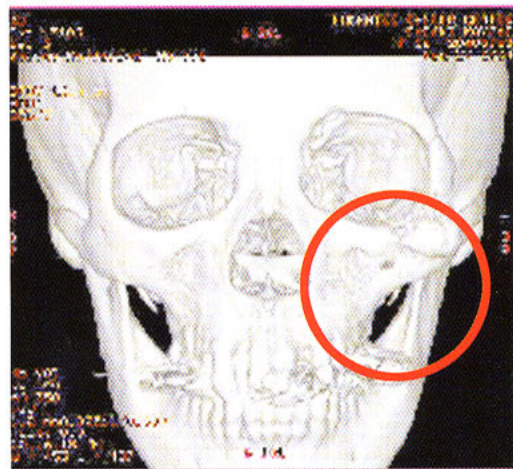
り温かいものが通過する様な感覚を感じることがあ
 りますが、これは造影剤が血管内に入ることにより
 血管が一時的に拡張するためで、そうした症状はす
 ぐに治まり心配はいりません。検査時間は検査部位
 や目的、造影剤使用の有無によって多少異なります
 が5分～15分程度かかります。



胸部～腹部までの血管の造影CT



腹部血管の3D（立体画像）



顔面骨の3D（立体画像）

～治験管理センターから公開講座のお知らせ～

***どなたでも参加できます*入場無料*事前申込み不要**

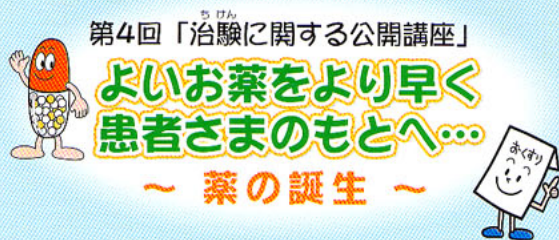
治験管理センター 松井 礼子

最近「治験に参加してみませんか？」のフレーズが新聞に大きなスペースをとって広告されているのを見かけるようになりました。しかし、治験ってなに？治験に参加するって人体実験みたいなものかしら？とちょっと怖い印象を持たれている方も多いかと思います。

「治験」とは新しいお薬が世の中に出て活躍するために、新しいお薬の候補を患者さまに使用して頂いて、安全で効果がしっかりとあるのか等を検証するための試験をいいます。患者さまに使用して頂く前に動物実験を中心に沢山の試験を行い、治験薬が人に対して安全であることを確認されています。治験を行うには安全に試験を行うことだけではなく、患者さまの人権を保護するという倫理面も確保するため、GCP という法律で定められた基準（ルール）に従って行われています。では実際具体的にどのような仕組みになっているのでしょうか？

当院では毎年「治験に関する公開講座」を開催しており、今回で第4回目を迎え、平成17年3月12日（土）に開催することになりました。毎年全道各地から約80～100名の方々の参加があり、治験とはどのようなものか、治験に参加するとはどのようなことなのかについてみなさまに紹介するとともに疑問や不安にお答えする場となっています。新しいお薬の誕生はみんなの願いです。患者さまの協力がなければ新しいお薬は誕生しません。私達治験管理センターのスタッフは、患者さまが治験に安心して参加していただけるよう、また参加いただいた患者さまの貴重なデータを新しいお薬の誕生に生かすために日々努力しています。

ぜひ一度、公開講座にご参加ください。心からお待ちしております。



日時：平成17年**3月12日**(土)
14:00～16:00

場所：アスティ45ビル
4階「アスティホール」
札幌市中央区北4条西5丁目

TEL(011)205-6654
(当日のみ有効)

入場無料

**どなたでも参加できます！
事前の申し込みは不要です。**

1. 治験ってなあに？

日本製薬工業協会 医薬品評価委員会
林 修嗣

2. 新しい肺がん治療と治験の役割

北海道がんセンター 呼吸器科 医師
磯部 宏

3. 治験の安全を保障する環境

北海道大学大学院・法学研究科教授
松久 三四彦

4. 治験に安心して参加できる ために・・・

北海道がんセンター 治験コーディネーター
CRC 奈良 明子